

要旨

近年ミクロ経済学では、バイアス(専門用語では model misspecification と呼ばれる)を持つ人々がどのような行動を取るか、についての分析が盛んになってきた。本書はこの一連の研究について、極力初等的な数学ツールを用いるようにして解説したものである。

第2章ではまず、経済主体が一人しかいないケースについて分析した。例えば、自身の能力について自信過剰なマネージャーが新規ビジネスを始めたとき、どのようなことが起こるかについて考えてみよう。マネージャーは経験を通じてこの新規ビジネスの利潤率を学んでいくのだが、自信過剰なマネージャーはそのバイアスゆえに、得られた情報を誤って解釈してしまい、その結果真の利潤率を学習することができない。より具体的には、自信過剰なマネージャーは自身の想定よりも低い売上げを観察するため、それを「売上げが低いのはこのビジネスの利潤率が悪いからだ」と解釈してしまい、時間の経過とともに利潤率を過小評価するようになってしまう。そして最終的には、このビジネスへの投資を減らしてしまい、過少投資の問題が起こってしまう。この「バイアスを持つ経済主体は情報を誤って処理してしまい、その結果通常とは異なる行動を取る」という現象は、経済学のモデルではバーク・ナッシュ均衡という概念を用いることで描写することができるのだが、このバーク・ナッシュ均衡について詳細な解説をした。

第3章では、複数の経済主体が存在するケースに分析を拡張した。複数の人からなるグループにおいて誰か一人がバイアスを持っている場合、そのバイアスを持つ人の取る行動が変化するのはもちろん、それ以外の人々の行動にも影響を及ぼすため、(第2章で分析した経済主体が一人しかいないケースに比べ)様々な結果が起こりうる。例えば、自信過剰なマネージャーがそうでないマネージャーと共同ビジネスを行なった場合、そのビジネスの性質次第で自信過剰な人は得をしたり損をしたりするのだが、これについて詳細な分析を行った。また、複数の経済主体が存在する場合には、「相手がバイアスを持っているかどうか」に関するバイアスなどが存在する可能性もあるが、このような高次のバイアスを持つ経済主体がどのような行動を取るかについても、簡単に議論した。こうした研究の成果は、実社会で組織を如何にデザインするかにあたって活用できると考えられる。